

緑ネット通信 No.57

緑のネットワーク・まつど

代 表 : 川上将夫
年 会 費 : 1000 円
口 座 番 号 : 00170-9-696174
連 絡 先 : 高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

かがやく笑顔あふれる 松戸の森の夏

森を森のまま維持している所有者さんの理解と、汗を流すボランティアと、協働する行政とがあつてのことですね！



いきなり捕まえたりしないで、今、捕まえても大丈夫かな?? ちょっと観察してから捕まえようね。
(夏の虫をさがそう Save The Green in 秋山の森)



小学生がザリガニ釣り体験。「また秋にも遊びに来た〜い」(関さんの森)



園児の訪問。何を見つけたのかな?(しんやまの森)



竹で作った水鉄砲、じょうずに出来たかな? 「里やまQ」が子どもたちのために頑張りました。



(「ドンちゃん・グリちゃん」の自然展 2017」 21 世紀の森と広場)



自分で作った巣箱を自分でつけた!(みなみの森・子どもとまつど)



今年も「Let's 体験」で多くの中高生が貴重なボランティア体験をしました。(三吉の森)



ボーイスカウトもやって来た(三吉の森)



森に隠れてるいきものを探しましょう(溜ノ上の森・子どもとまつど)



恒例の「虫ハカセになろう!」「工作教室」(根木内歴史公園 根っこ会)



コフキコガネ



短大生もやって来た(秋山の森)

夏休み 子どもたちに楽しい竹細工イベントを！

高木 喜久雄

松戸市の里やまボランティア活動では、5年前に始まった「セタプロジェクト」から発展し、3年前から夏休みに竹細工イベントが実施されてきました。中心的役割を担ってきた「里やま応援団一起の会」副代表で「みどりの行動会議」のメンバーでもある高木喜久雄さんに、その想いと今年の様子を語っていただきました。

今年のセタプロジェクトは6月27日、ボランティアの有志が紙敷みなみの森で竹を伐りだし、市役所のトラックで希望する学童クラブなど28施設に31本を配布し、喜ばれた。



7月17日、子育てクラブのパパさんたち「パパラボ」が主催する流しソーメン大会に協力。子どもたちはノコギリで竹を切り、食器を作り、竹を割り、箸も作る。小学校にも入らない小さな子も多く、子どもの手を上からパパが握り、一緒にノコギリを使う姿は、見ても嬉しい。もちろん、ソーメンもいっぱい食べる。



8月17日「幸谷学童クラブ」で竹ポックリ作り。44人の子どもたちがノコギリを使って竹を切り、ドリルで穴をあける。広い校庭をポックリに乗って歩き回る姿は、とても楽しそう。8月26日は「上本郷第2学童クラブ」で水鉄砲づくり。これまたノコギリで竹を切り、キリで穴をあける。そして、スポンジをうまく調整して鉄砲に仕上げる。出来上がった水鉄砲で水を飛ばして、びしょ濡れになりながら大騒ぎ。18人の子どもが作っただけでなく、一緒に来たパパやママも一所懸命に作っていた。どちらの日も、「みどりの行動会議」と「里やま応援団」から15人ほどの参加、子どもたちの手を取ってノコギリの使い方を熱心に指導していた。



8月27日秋山の森で行われた、NPO「子どもとまつど」主催の「竹の工作教室」では「水鉄砲」と「ブーブー笛」を制作。7組14名の親子が、森を巡った後、子どもたちの希望で材料のマダケを全員が伐採体験。どの子も



一所懸命やっていた。作品作りは、細かいところ・ポイントとなるところは手助けしたが、ノコギリ・キリは意外と上手くこなしていた。



私には竹細工イベント等で子どもたちにノコギリなどの刃物を使わせたいという想いがある。

今の小学校では鉛筆削りしかない。昔のような鉛筆を削るナイフは全く、いくら探してもない。1960年の日比谷公会堂での浅沼稻次郎刺殺事件以来、若者から刃物を取り上げる政策が展開されてきた。最近は台所に包丁のない家や、リングも剥けないなどという者も少なくないという。現在日本で唯一、鉛筆削りを置かず、ナイフで鉛筆を削る教育をしている小学校が1校だけある。入学するとPTAが全員に肥後守をプレゼント。それで削るのだ。ここの元校長の報告によると、そのことによってさまざまな困難にぶつかったときに、これを乗り越えていく子どもたちが育つという。(山と溪谷社発行 ヤマケイ新書「刃物と日本人」にこの校長のレポートが載っている)

私がノコギリにこだわるのはここにある。うまく使わなければ、ケガをする。ケガをすれば痛いし、血も出る。だから一所懸命に注意をし、安全に使う工夫をする。ときにはちょっと失敗をして、痛い経験をすることも大切だ。(もちろん、大けがをさせるわけにはいかないが…)

こうした体験を通じて、考え、困難を乗り越えていく子どもに育ってほしいと思うのだ。刃物を取り上げることが、危険に遭わないということではないだろう。危険を乗り越える子どもになってほしいのだ。

寄せられる感想に「うちの子がノコギリをひいて作ったんですか？」という驚きの声が多い。同時にとっても喜んでいただけている様子だ。今回も水鉄砲づくりの次の日、子どもたちは水着持参(びしょ濡れになって遊べるように)で登校したという。それがクラブ指示ではなく、保護者がメールを回して連絡しあってだという。これも嬉しい話ではありませんか？

「Let's 体験!!」 里山整備体験

関さんの森を育む会 武笠 紀子

中学生～20代向け夏のボランティア体験講座「Let's 体験!!」を受け入れる『里山整備体験』が関さんの森で企画され、竹林(マダケ)の整備を行いました。今回は降雪の影響で曲がったマダケを中心に伐採です。



参加者は、中学生8名(男子3・女子5)、高校生6名(男子3・女子3)、成人1名の計15名。最初に育む会のスタッフ

的な企画は、「フィールドコラボレーション」という千葉大の授業の一環で、今年5月から育む会の活動に参加している3年生の鹿島さんが、おこないました。

最後に、鹿島さんから参加者全員に「参加証」が渡されました。

今回の体験を通じて、都市に残る貴重な緑を大切にする気持ち、一歩進んで、守るために汗を流してくれる人の環がひろがっていくことを期待しています。



がマダケの伐りかたとその後の処理について説明。そして早速中高生は2～3名が1組になってスタッフとともに作業に入り、マダケ約40本を切り倒しました。倒したマダケを3m程度に切り分け、小枝も棒で叩いて落とし、最後は稈と小枝に分けて、決められた場所に積み上げます。

森の中は涼しいとはいえ、真夏の作業は過酷です。30分作業をしたら、水分補給をかねて休憩。塩分補給は関さんの森の梅干しです。

なお、今回の整備体験の全体



ヤマユリの咲く森から

藤田 隆

21世紀の森と広場にほど近い「芋の作の森」、北側の斜面に今年もヤマユリが咲いた。ユリ独特のかぐわしい香りが森を包む。一、二本なら珍しくないが、毎年増え続け、今年は200本まで数えたという。

森の所有者さんから世話を任された「八輝の会」の皆さんは、6年前、森の活動を始めて程なく、斜面の藪の中に白いものが目立つので近寄ってみると、ヤマユリ数本が咲いていて驚いたそう。所有者さんが毎年ヤマユリの開花を楽しみに、子どもを育てるように大事にしてきたという話を聞き、森の仲間で何とかヤマユリが開花するように、世話を続けてきたという。

「200本を超えるヤマユリの世話はどのように…」と話を向けると、5月の初め、芽が出る頃、つる性の植物に絡まれないように外して刈り取る作業から始め、芽から伸び始めると5輪、6輪と咲く花の重み

に茎が折れないように丈夫な支柱で支えを作る。毎年芽が出る場所が異なるので、差し替えが必要だそう。これが終わると、つる性の下草が伸び始めるので刈り取るたちごっこが夏まで続く。夏の短い時期、斜面を真っ白に覆う。それは見事だ。



花が終わり、秋に種をつけると取っておいてパラパラと撒いてきたという。これが効を奏したのか200を超えるヤマユリの里になった。咲き始めたヤマユリを今日は何輪、明日は何輪と、会員の皆さんは胸躍らせながら森に入るそうだ。

「ヤマユリだけじゃないですよ」と記録に残した野草の写真を見せてくれた。タチツボスミレ、キンラン、ギンラン、ホウチャクソウ、ワニグチソウ、アマドコロ、オトコエシ、ヒヨドリバナ、カシワバハグマ、ハナイカダ、ウラシマソウ、カラスビシャクそのほかにも多くの草本、木本が咲く。「カブトムシがいますよ」というのでビオネストに駆け寄ってみるとカブトムシがすでに18頭、虫かごに収まっていた。ここでも生き物の宝庫であることが証明された。作業で出た枝葉を溜めたりするビオネストを作るとき、地面を50センチ程掘り返すと、黒土に覆われた肥沃な腐葉土が堆積して森の表土を覆っていることが分かったという。

この森はシラカシとスギ、ヒノキが混生し、枝打ち、間伐は所有者さんが継続的に行ってきたこと、落ち葉はそのまま堆積し、豊かな森に結びついたのではないかと思われる。

所有者さんは、森の斜面から見えるお宅にお住まいで、差し入れをもって話の輪に加わり、休憩が始まる。おしゃべりや笑い声が森にこだまする。ゆったりとした時間が流れていく。

いつまでも残ってほしい松戸の風景がヤマユリ咲く千駄堀の森にあった。



～しぜんのコラム 35～

カラスウリの花は夜開く

秋にオレンジ色の果実をつけるカラスウリ。中に入っている黒い種子は、カマキリの頭に似ているが、「打出の小槌」や「大黒様の顔」に見立てられ、財布の中に入れるとお金が貯まるといわれている。

一方、カラスウリの果実は有名でも、花を見たことがある人は、そんなに多くない。花は日没頃から咲き始め、明け方にはしぼんでしまうからである。関さんの森を育む会の夏の恒例行事『夕涼みの会』は、カラスウリの花を愛でながら一杯やろうという企画だ。



カラスウリの花 2017.8.20 関さんの森

さて、カラスウリの花はなぜ夜に咲くのだろう。昼間は活動している昆虫も多いが、花も多いから、自分の花粉が別の植物に届くという無駄も多い。そこでカラスウリは、花の少ない夜に花を咲かせ、夜行性のスズメガという専属の昆虫(蛾)に花粉を運んでもらうことにしたのである。

弱い月の光の中でも目立つように、純白のレースで着飾る。花粉を運んでもらうご褒美は蜜であるが、スズメガの口吻の長さにあわせて、筒状になった花の奥に蜜を分泌させる。スズメガ以外の昆虫は、カラスウリの蜜を得ることもできないし、花粉を運ぶこともない。さらにカラスウリは雌雄異株。これは自家受粉を避けるための工夫でもある。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー43 (観察学習会 58)

「名勝に指定された戸定邸庭園と千葉大学園芸学部の洋風庭園をめぐる」

戸定邸庭園は130年前の築造当時の姿に復元工事が進行中。今回は、その様子を戸定歴史館職員の解説で見られる、またとないチャンスです。徳川昭武の想いを想像しながら、普段は入れない庭園部分を散策しましょう。お隣千葉大園芸学部の洋風庭園もたずねます。

10月8日(日) 9:30~14:00 (小雨実施) 参加費300円(会員100円)

集合: JR松戸駅西口デッキ 9:30(現地解散) 持ち物: 飲み物、弁当、敷物、雨具

問い合わせ 090-2935-9444 (高橋)

その他 歩きやすい服装でどうぞ